

つながる読書

【報告】

赤ちゃんからの図書館サービス～子どもの育ちを支援成長をつなぐ

林千智(多気町立勢和図書館館長補佐兼司書, 日本図書館協会認定司書第1078号)

はじめに 多気町図書館の全域児童サービス

多気町は、2006年1月、それぞれに図書館を持つ、旧勢和村と旧多気町が合併し誕生した町である。そのうち、勢和地域にある町立勢和図書館は1997年開館当初より、児童サービスを核に地域づくりの拠点となるべく図書館づくりを行ってきた。

合併後は、「全域児童サービス」と称し、培ってきたその基礎を町全域に広げ活動している。町内の2公共図書館、2子育て支援センター、5保育園、5小学校、2中学校、各種関係機関と連携を取り子どもの育ちを支えていけるよう、図書館の役割を生かしたいと考えている。

I. 子どもたちへのサービス

—子どもの「言葉」を育て、紡ぐこと

子どもたちには、成長する中で聞く力、読む力、調べる力を得て、生きる力にしていってほしいと願っている。児童サービスの大きな役割だと考える。

1. 聞く力

そのためには、赤ちゃん時代のわらべうたから。当館では「おひざでだっこのおはなし会」で年齢別にわらべうたと絵本の時間を設けている。また、子育て支援センターへは、マタニティ向けのパパママサロンとブックスタートで訪問し、講座やおはなし会を開いている。ブックスタートでは1組ずつに、子どもの成長発達、言語の獲得、絵本の意義などを話し、実際にわらべうたを歌い絵本を読んでいる。また、保育園・小学校へは毎月、各年齢ごとすべてに出前おはなし会を行っており、司書間で絵本の選書、ストーリーテリングの技術研修も積み重ねている。

並行して「布の絵本」を乳幼児サービス・障害児サービスの大きな柱として位置付けている。ボタンやファスナーの開閉などを取り入れた布のあたたかな手触りで遊

ぶことが、手指の作動能力促進、集中力や観察力の向上に役立つ。当館では、2006年より発足した「布の絵本の会 ささゆりお針箱」が制作・メンテナンスを行ってくれており、現在、蔵書となったものは48点。すべて貸出可能であり、図書館のバリアフリー絵本として大きな支持を得ている。

これら五感を育む身体性を伴ったアプローチの上に、今夏で18回目となった人気事業「ブッククラブ」を積み重ねている。学校の長期休みを利用して4日間図書館に通ってもらい、司書が読む1冊の物語を皆で楽しむ、というものだ。1日に70分ずつ、物語に身を浸した子どもたちは、最終日、まるで自分自身で読破したかのような達成感とともに、物語に登場したおいしいものづくりで、さらにその世界を味わう。この企画には、1年生から6年生まで毎回40人前後が参加するが、子どもたちは帰宅後、今日聞いた物語を家族に向けて披露するとのことである。この企画の鍵は、何を読むかだ。子どもが自らは手に取らない長編で、長年読み継がれてきた力のある、耳で聞いて楽しいもの、と考えている。これまでに、ナルニア国物語、リンドグリーン、プロイスラー、クリアリーなどの作品を読んできた。この夏は、多忙になってきた子どもたちの動向もあり、親子で参加してもらおう一晩だけのナイトライブラリーとして企画した。保護者の方には、ぜひ家でも物語を読んでやってほしい、家族で楽しんで、と伝え、子どもを取り巻く環境と私たち大人の果たす責任についても言及、共有した。

2. 読む力

ブッククラブで長編に対し自信を持った子たちは、自らも手を伸ばすようになる。そこで3年生から6年生には、隔月の出前ブックトークも行っている。学年に合わせ、テーマに沿って様々なジャンル、レベルのものを選び、どう組めば1冊1冊が生きるか、子どもたち一人ひとりに届くのか、熟考する。1回10冊前後のブックトークでは、30冊程度の本を候補にあげ絞り込んでゆく。読み込み、考え、を繰り返す作業は大変だが、終了後、読みたい本に予約をかけに殺到、じゃんけんで順番を決め長蛇の列を作る子どもたちの姿を思い出し、気を引き締める毎日だ。中学校へも、各学年に年2回ずつ行い、子どもたちの成長ぶりに学ぶことが多い。

3. 調べる力

楽しく長編を読み、科学や社会にも好奇心が高まってくると、調べる力も本来の意欲につながると感じる。公共図書館では、5・6年生対象に「子ども司書大使」に取り組んだ。これは、三重県子ども読書活動推進会議で紹介された「子ども司書」を、当町アレンジしたものである。夏休み、子どもたちに“図書館使いの達人”かつ“図書館の親善大使”になるための講座を受講してもらうものだ。その中でも特に、「図書館を使って調べる」方法を体得することを重要視した。今年は、その裾野を広げるために「宿題お助け講座」を初企画し、小学3年生から中学生対象に、自由研究・感想文の取り組み方を伝授する講座とした。準備から進行まで、子どもたちの言動から気づかされたことも多く、来年度以降への良いステップにつながった。

II. 子どものまわりの大人たちへのサービス

—大人の「関係性」を育て、紡ぐこと

1. 図書館サークルと

勢和図書館サークル連絡協議会「風の丘の仲間たち」とは様々な協働を行っている。学校図書館司書配置運動、子どもゆめ基金助成活動、布の絵本の会を発足・継続、「おまめさんかなあ」の活動など、長年、共に学び活動してきた経緯から、現在は図書館の理念を共有し応援団的存在となり、図書館を支える地域の豊かな土壌となってくれている。

2. 学校司書と

サークルとの連帯でかなえられた学校司書配置。現在は、全域児童サービス担当司書を中心に、町内7小中学校に配置された各学校司書と公共司書が共に学ぶ「児童サービス合同研修」、授業支援や調べ方学習の内容を検討する「学校司書連絡会」を行っている。

授業支援に関して、公共図書館は通常的に、学校司書の相談を受け資料や情報を提供しているが、さらに、コミュニティスクールを導入している勢和小学校には、当館で始まった「おまめさんかなあ」プロジェクトを学校に移行し、大豆の栽培から加工までの作業と授業を全校で行うことになった経緯から、地域の図書館として深く関わっている。そのための「授業デザインシート」を作成、資料（本や具体物）を準備・提供し、進行の提案をしている。教科書のない授業であるため、確実に客観的な情報を提供するために様々な文献にあたり、それらを駆使した授業展開となる。公共図書館の授業支援の一形態として、学校司書たちにも伝えている。これら町内司書の様々な授業支援の蓄積をまとめたものが「第21回 図書館を使った調べる学習コンクール 指導支援部

門」において優秀賞・日本図書館協会賞を受賞した。

3. 「勢和地域資源保全・活用協議会」と

前述のコミュニティスクールは、この協議会との深い連携の上、実施している。さらに、保護者や地域住民が加わりスタッフを結成。役割分担を明確にし、かつ、図書館は、学校教育支援、市民活動支援、課題解決支援と位置づけ取り組んでいる。

4. 役場各部署・地域事業所・団体と

この考え方は、他団体との連携でも同様である。福祉課と講演会を企画、各学校の動きや親子イベントとも連動させ、「子どもが育つまちづくり」のための仕組みづくりを行ったり、現在も、町内団体と共催で「ブックフェス」を企画準備、継続中である。

III. 図書館は“つなぐ場”，風が行き交う「窓」

子どもたちの言葉の力を育てること、丁寧な選書で環境を整えることは、子どもたちが「前を向いて生きていこう」と思える要となる。図書館は“つなぐ場”，風が行き交う「窓」。子どもたちが幸せであるために、大いに利用されたいと願う。

おわりに 「根っこ」と「翼」を育む

～「自立」と「共生」を支える

今後も図書館が、子どもたちの「根っこ」と「翼」を育み、自分で考え判断できる「自立」と、ともに手を携え生きていく「共生」を支える場となるよう努めていきたい。